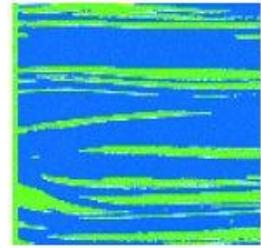


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2020年 秋号 No. 100 (2020年10月31日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 武藤 崇

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内

FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>

E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

100号記念記事1:行動分析学 今昔物語.....	島宗 理
100号記念記事2:行動分析学会はニューズレターが(も!)オモシロい!.....	武藤 崇
100号記念記事3:常識を乗り越える.....	小野 浩一
ニューズレター100号に寄せて:おめでとう席でおめでたくないお話を一席.....	坂上 貴之
第38回年次大会(オンライン開催)を終えて.....	吉岡 昌子
行動分析学のミライ:これからの25年間を展望する.....	松田 壮一郎
自著を語る:スキナー重要論文集(全三巻).....	藤巻 峻
編集後記.....	ニューズレター編集部

<100号記念記事1>

行動分析学 今昔物語

島宗 理

(法政大学)

まき子「どうもーどうも、渦潮まき子ですー」

かな子「どうもーどうも、娘のかな子ですー」

まき子&かな子「ふたりあわせて、クルミガールですー」

かな子「母娘で漫才やらせてもらってますー」

まき子「母娘にはみえへんで、よーいわれませう」

かな子「わたし、まだ大学生なんですよー」

まき子「そうなんですよー。畿央大学という奈良の名門校ですー」

まき子&かな子「ありがとうございますー」

まき子「あーどうもです。今ベルマークをいただきましたけどもね」

かな子「トークンですねー」

まき子「こんなん、なんぼあってもよいですからね」

かな子「いろいろなものとの交換できますからね」

まき子「ねーありがたいですよ。ほんとにね」

かな子「いきなりですけどね。うちのカレンが授業の宿題でレポート書いてるんやけど」

まき子「あっ、そーなんや。坂上くんやっつけ」

かな子「ちゃうちゃう。それは元カレ。今は武藤タカくんやって」

まき子「あんた、あいかわらずモチキやな。母さんの DNA やるか」

かな子「そんでな、タカくん。レポートのテーマをちょっと忘れたらしくてね」

まき子「宿題のテーマ忘れてもうて、どうなってんねそれ」

かな子「でまあ色々聞くんやけどな、全然わからへんねんな」

まき子「わからへんの？ ほなお母さんがね、タカくんのレポートのテーマ、ちょっと一緒に考えてあげるから、どんな特徴ゆうてたかってのを教えてみてよ」

かな子「あー、ハトを実験箱にいれて、キイツつかせるやつやってゆうねんな」

まき子「おー、行動分析学やないかい。その特徴はもう完全に行動分析学やがな」

かな子「行動分析学なあ」

まき子「すぐわかったやん、こんなんもー。これでもお母さん、大学で行動分析学、勉強したんやで」

かな子「そうなんえ」

まき子「そうや。学会のニューズレターに登場したこともあるんやで。もう二十年以上前やけど 注1)」

かな子「さすがやな、お母さん。でもこれちょっとわからへんのやな」

まき子「何がわからへんのよー」

かな子「いや、あたしも行動分析学と思うてんけどな」

まき子「いやそうやろ？」

かな子「タカくんが言うには、J-Stage でト

ップにくるくらい論文がよく読まれてるって言うねんな

まき子「あー、ほな行動分析学と違うかあ。行動分析学の論文がトップにくる訳ないもんね」

かな子「そやねん」

まき子「行動分析学はね、まだあまり知られていないから魅力があるってところもあるんよ」

かな子「そうなんや」

まき子「行動分析学側もね、メジャーになったら荷が重いにちがひん。へんに名前が売れるとネットで叩かれる時代なんやから」

かな子「そやな」

まき子「スキナー先生やって"Happy Few"って言ってたんやから。行動分析学ちゃうがなこれ。もう一度詳しく教えてくれる？」

かな子「なんであんなに折れ線グラフ描くのがわからんらしいねん。統計の検定もせえへんし」

まき子「行動分析学やないかい。論文に占めるグラフの割合、むちゃくちゃデカインやからあれ。でも、あたしはね、あれは自分の得意な土俵だけで勝負してるからやと思ってるんよ」

かな子「まあねー」

まき子「ほんであれよー。よくみたらわかるけどね。ベースライン期と介入期の差が目で見てもわかるくらい大きいグラフなんよ。統計の検定せえへんでも明らかなくらいおっきな差。行動分析学やそんなもんは」

かな子「わからへんねん、でも」

まき子「何がわからへんの」

かな子「あたしも行動分析学と思うてんけどな」

まき子「そうやろ」

かな子「タカくんがいうには、数理モデルとかも使うらしいねんな。ペイズとかゆうてたわ」

まき子「ほな行動分析学ちゃうやないかい。モデルや理論をつくるための研究って、そんなことしてる暇あったら制御変数みつける実験せえよつうのがスキナー先生の教えやったやん」

かな子「そやねん」

まき子「行動分析学ちゃうかもな。ほな、もうちょっとなんか言ってなかった？」

かな子「自閉症の子どもの支援に役立つんや。なんかアバアバゆうとったわ」

まき子「行動分析学やないかい。この二十年くらいで日本でも ABA の家庭療育支援が広く知られるようになったんやから。行動分析学よ、そんなもん」

かな子「わからへんねん一、でも」

まき子「なんでわからへんの、これで」

かな子「あたしも行動分析学と思うてんけどな」

まき子「そうやろ」

かな子「いまや学校教育や心理臨床でも人気らしい言うねんな」

まき子「ほな行動分析学ちゃうやないかい。学校でハトの話したら、先生たちに子どものこと動物あつかいすな一ってチョーク投げられるもんね。行動分析学のことはねー、相手を選んで話さないとならんやで」

かな子「そやねん、そやねん。気をつけないと炎上するで一ってうちの大学の先生もゆうとった」

まき子「そやろ。それでも、もしかしと気づいて仕事に使い始めた人は、だんだんはまってしまうねん」

かな子「そやねん、そやねん」

まき子「そういうカラクリやから、あれ」

かな子「そやねんな、あたしも行動分析学と思うてんけどな」

まき子「そうやろ」

かな子「タカくんがいうには、質問紙使ってデータとることもあるらしいねんな。ヘキサ

ゴンとかゆうてたわ」

まき子「ヘキサゴンは平成のクイズ番組やと思うけど、ほな行動分析学と違うやないかい。行動分析学は行動変えてなんぼやけん、行動について本人さんがどう思うか変わってもしゃあないよ」

かな子「そうよなー」

まき子「行動分析学ちゃうな、それ。もうちょつとなんか言ってなかつた？」

かな子「タカくんが言うには、専門用語が難しいっていうねん」

まき子「行動分析学やないかい。用語にやたら気を使って、そうそう簡単に新しい概念も増やせへんから、初学者にはどうしたってとつつきにくなるんやって」

かな子「せやねん」

まき子「強化とか弁別とか言うてた頃はまだしもやったけど、最近は EO やら MO やら関係フレームづけやら、厄介なことにもなつとんのよ」

かな子「でもな、わからへんのよ」

まき子「なんでわからへんのこれで」

かな子「あたしも行動分析学と思うてんけどな」

まき子「そうやって」

かな子「ばらばらだった用語を学会がまとめて事典つくつたらしいって、タカくんがいうねん」

まき子「行動分析学ちゃうがな。みーんな個性的で我道行くのが研究者の人たちなんやから、そんなんまとめられるわけないやん」

かな子「そうよなー」

まき子「ほなもうちょつとなんかゆうてなかつた？」

かな子「ジャンルでいうたら心理学やっというねん」

まき子「行動分析学やないかい。確かに異端

児ではあるけど、あれでも一応ストレス心理学なんやから。もうそれ行動分析学や絶対」かな子「でもタカくんは、行動分析学ではないって言うねん」

まき子「ほな行動分析学ちゃうやないかい。タカくんが行動分析学ではないと言うんやから、行動分析学ちゃうがな」

かな子「そやねん」

まき子「ホンマにわからへんがなこれ、どうなつとんねん、もう」

かな子「んでオトンが言うにはな」

まき子「オトン？」

かな子「認知心理学ちゃうか？って言うねん」

まき子「いや絶対ちゃうやろ。もうええわー」

かな子&まき子「ありがとうございましたー」

注 1) 1996 春 1(3)号, 1998 夏 11 号など。

※特定の個人を揶揄しているとも受け取れる内容が含まれていますが、本記事においては当事者間での合意が形成されていることから、掲載可としています。ニューズレター編集部は、原則として特定の個人を揶揄したり嘲笑したりする内容を含む記事の掲載は容認しない方針を取っております。ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

(行動分析学会ニューズレター編集部)

<100号記念記事2>

行動分析学会はニューズレターが（も！）オモシロい！

武藤 崇

（同志社大学）

え？ 100号！ それはスゴイ。歴代の編集員の人たちとか、寄稿してくれた人たちに感謝だよね。でも、年4回発行だから、創刊号から数えて25年しか経ってない、ってこと？ なんか、もっと前からあったような気がしていたけど。

自分が最初にニューズレターに寄稿させてもらったのは、何だったかなあ。あ、そうそう『ダンベル・ダイエット』試論』っていうヤツで（1996年夏号 No.4）、当時流行していた科学的なダイエット法に関する内容だったな（タイトルの元ネタは、吉本隆明（吉本ばななのパパ）の「マチウ書試論」）。実際に、そのダイエット法を試していたんだ。（笑）まあ、確かに。自分自身を使って、まず実験してみる（体験してみる）ってのは、変わってないよね、ゼンゼン。

その後も書いているか？ うん、書いている、書いている。「自著を語る」のコーナー

に何回か書いるはずだよ。印象に残っているの？ んん…そうだな…『『アクセプトランス & コミットメント・セラピーの文脈：臨床行動分析におけるマインドフルな展開』への招待～『海辺のカフカ』風』かな（2007年冬号 No.45）。それって、『海辺のカフカ』の登場人物の2人（ホシノさんとナカタさん）が会話していて、ホシノさんがオレンジ本（『アクセプ～』の表紙がオレンジを基調としたデザインであったため、そう呼ばれている）を読んでいるという「あり得ない」設定で…まあ、そもそも『海辺のカフカ』がフィクションなんだから、あり得ないも何もないんだけどさ。ん？ ちゃんと紹介になってるか？ それは、あとで読んでみて（笑）。でもさ、自著を紹介するのって、なんか恥ずかしくない？ え？ こっちの書きっぷりの方がよっぽど恥ずかしい？ 確かに、それは一理ある。

<100号記念記事3>

常識を乗り越える

小野 浩一

暑かった今年の8月が過ぎ秋の気配が漂いはじめた頃、日本行動分析学会のニューズレターの発行が100号になるので、何か書いてほしいとの依頼を受けた。今まで、発行されるたびに興味深く読ませていただいていたが、号数を意識したことはなかった。本学会のニューズレターは原則として春夏秋冬の年4回発行されてきたはずなので、単純に計算すると発刊は25年前になる。学会HPで創刊号を調べてみたら、1995年秋、島宗編集局長の「もっと行動を！」の言葉でスタートしている。あまりに計算どおりなので驚いた。

ニューズレターは、会員相互の情報交換の場として貴重な役割を果たしてきたと思う。学会の行事に関する情報や学会運営に関する事務的な記事もあるが、読み応えがあったのは会員各自の「学会参加記」、「こんな研究(会)しています」、「意見や主張」、「書評」、「シリーズの読み物」などであった。さまざまな場で活躍している会員の方々の仕事ぶり、考えや体験談に接し、楽しく読ませていただいた。ニューズレターがなかったら、私はとっくにこの学会を辞めていたかもしれない・・・。

さて、今回の執筆にあたっては、編集部の大久保先生から、「基礎研究」をキーワードとして何か書いてほしいという付言があった。私が「基礎研究」の領域での仕事が多いのでそのような依頼になったものと思うが、今やニューズレターの読者は多様な領域で活躍している方々が多いと思うので、少し幅の広い話をしたいと思う。

私が学生だった時、数理心理学を中心に世界で活躍された印東太郎先生が、科学のはたらきは「常識の精密化」とであると話されていたことを印象深く覚えている。調べてみたら、「心理学特殊Ⅱ」という授業のノートにその部分があった。その概要は、私たちは特に心理学の対象(ヒトの心理や行動)については、ある程度の常識的な知識を持っている。その常識を実証的なやり方で乗り越えるのが研究活動である。具体的には「常識の精密化」、「新事実の発見」、「仮説の検証」の3つの形態によって乗り越える、との記録がある。確かに、私たちがやっている仕事は、基礎研究であれ応用研究であれ、実践であれ、普段何気なく見聞きしている事柄の中に、一定の秩序や法則性そして新しい知見を見つけ出し、常識を乗り越えることと言えらる。

今の流行り言葉で言えば、この作業は現象の「可視化」という観点から捉えなおすこともできそうである。つまり、おぼろげながら見えているものを組織的に観察して記述する、また、アプローチの角度や距離を変え、見えていなかったものを見えるようにして新たな姿を見つけだす、ということである。

ただ、現実問題として、ある知見が「常識を乗り越えた」ものであるか否かをどのように測ればいいのか。論文の被引用回数などが一般的かもしれないが、もっと身近で実用的なものとして、受け手が(しばしば驚きを伴って)「納得」したかどうかで決まることではないか、と考える。ここで「納得」というのは、提

示されたエビデンスが受け手にとって、その後の行動のための弁別刺激あるいは確立操作などの先行事象として機能するようになる、ということである。

「常識を乗り越える」のは易しいことではない。それなりのエネルギーも要る。若いうちは、専門用語や研究法、たくさんの研究報告や実践例などを学び、その中で自分の専門領域やデータ収集のスタイルを身につけ、時には常識を乗り越えながら実績を積み上げていく。しかし、ある程度の年月が経つと、慣れ親しんだやり方、考え方が「常識」と重なってくる。「定常状態に達した行動は変動が少ない」と基礎研究が教えるように、大きなエネルギーを要するような行動変化は起き難くなる。「常識を乗り越えた」行動や成果が強化されるような機会がもっと増え

るといいと思う。近年、行動分析学においてもさまざまな常識が乗り越えられ、新しい視界が開けてきた。そして、やがては新しく見えてきた世界もまた乗り越えられる対象となり、さらに新しいエビデンスによって乗り越えられることだろう。

「常識を乗り越える」試みは研究や実践という仕事だけでなく、実は生活人として過ごす日常においても当てはまることではないか。新型コロナウイルスの感染拡大に伴って、今まではあたりまえにできていたことができなくなった。多くの人々が制約のある環境の中で、今までの常識では思いつかなかった新鮮で発展的な行動を見つけ出し、それを遂行している。私も、あとしばらくは常識を乗り越える試みを続けていきたいと思う。

<ニュースレター100号に寄せて>

おめでたい席でおめでたくないお話を一席

坂上 貴之

どんな学問でもその批判的継承なくしては発展していかない。そしてこの批判的継承を保障するものが、思想と良心の自由、学問の自由、言論の自由であることも言を俟たない。これらの自由はどこからか与えられるものではなく、学問を志す者が不断に作り出し維持していくものだ。そんな、いわば常識的なことが、常識ではなくなるという事態が、この原稿を依頼された後に起こってしまった。言わずと知れた日本学術会議の会員任命拒否問題である。

折しも Skinner に対して Rogers が、行動の原因としての環境の役割に対して、価値や目的の優位を説いている、Rogers と Skinner の対話論文の翻訳を点検しているさなかである。思わずこの私も、この問題に対する自分の行動を制御している要因が、価値や目的にあるかのように思ってしまった。自由、平和、人権、法の精神、近代の作り出してきたこれらの「価値」を守る「目的」において、自らが行動しているかのような、そんな錯覚に陥ってしまったのである。

無論、これは錯覚である。私は自分の取った行動が、自分の行動履歴と重なっており、そしてこの行動を強く制御している、それらの履歴と自分の現在の環境の要因を直ちに挙げることが出来る。「価値」や「目的」もまた、これらから作り上げられるとは言うかもしれない。しかし、ならばそうした媒介的な概念の無用なことも、また認めなくてはならないだろう。私の取った行動を理解するのに、上で述べた「価値

や「目的」はおそらく不要である。

別の行動の理解の仕方もある。ルール支配行動に則って、自分の行動を説明するのである。つまり、自分がそのように行動する原因を、過去から現在に至る日本をめぐる状況の変化についての言説や、その定款や法の解釈などに懸命に探し求め、あたかもそのような妥当な論理に立った末に自らの意思決定があったかのように振る舞うのである。そうした様子を見ると、自分もまた、そのような「捏造」や「粉飾」に満ちた行動をとっているのではないかという不安に駆られる。逃避や回避、特に行動研究で回避行動と呼ばれる類いの行動についての説明は、そこに直接関わる環境事象が見えないだけに、そうした捏造や粉飾の温床となる。だが、もちろんそこには除去型強化子が、あるいはその弁別刺激が存在しているのである。

私たちは、自分の行動の理解に対して、もっと謙虚になるべきである。学問の批判的継承の保障という観点は、基礎であれ応用であれ、学問という実践の一端を担う者にとって欠くべからざるものであると思う。少なくとも私は、行動を学問する自分の在り方を、先達たちからそう受け継いできた。自分の力だけではなしえないものの、そうした継承を何代にもわたって継続していくことのみが、行動の深い理解に達することを可能にするのである。

私たちは、自分が回避しようとしている行動を率直に認めるべきである。回避しようとしている行動とは、多くの場合、嫌悪的な刺激が伴

うものであり、負荷が高く、ストレスフルで、選択したくない行動である。したがって、自分が今、どちらの行動をしているのかは、一目瞭然である。試験勉強をしたくないとき、私はよくギターを弾いてそこから回避していた。だが、もちろんは試験はやってくる。この率直に認めるということはないがしろにすると、おそらく、私たちはそのような履歴の中で、学問をする人ではなくなっていくのであろう。

Skinner は、彼の第 2 次世界大戦中のアメリカ政府への戦争協力や、戦後すぐに出版したユートピア小説 *Walden Two* によって、自由と尊厳に価値を置く様々な立場の人々から批判されてきた。しかし彼は最後まで、環境による行動の制御を、随伴性の枠組みから、実験的にも理論的にも主張し続けた。その行動は、おそらく、アメリカやヨーロッパを中心とした知的伝統の中では、社会的レベルで嫌悪的な刺激が伴うも

のであり、負荷が高く、ストレスフルで、選択したくない行動であったと思われる。しかし、学問の批判的継承をし続けるには、そうした行動もまた必要なのである。

しかし、ここまでで私たちの対抗制御が終わるのであれば、あるいは謙虚な行動観察が終わるのであれば、それはまだ Skinnerian のエピソードの域を脱しているとは言えない。繰り返される歴史の修正、新しいメディアを使ったフェイク、自己保身に訴えた差別等々、彼の時代、すなわち第 2 次世界大戦の終了後のユートピア的時代、そのあとを生きる私たちには、自分たちの時代特有の新しい行動の問題が山積しているのである。100 号までのニューズレターの継続を祝うとともに、この機に、自分たちの学問の批判的継承を改めて見つめなおしてみたい。

<年次大会開催記>

第38回年次大会（オンライン開催）を終えて

吉岡 昌子

(愛知大学)

2020年8月28日（金）から8月30日（日）にかけて、第38回年次大会が開催された。38回目とあって、大会ウェブサイトは前年度までにほぼ定型化され、当日までの段取りは、USBに入った数年分の引継ぎ資料を見れば大丈夫と、大船に乗った気持ちで開催校を引き受けた。ところが、2020年2月中旬から新型コロナウイルスの感染拡大が取りざたされ、4月には愛知県でも独自の緊急事態宣言が発出され、前期の授業はオンラインになった。授業の対応が先決と、大会準備が少しお預けになったが、4月中頃までは、まだ8月末のイベントは開ける可能性があると考えていた。

連休明けに授業の目途が付き、本腰を据えて大会の準備にかかると、想定していたのとは真逆の現実に、不確実な要素が多く、前例がない状況で、自分はどうやって意思決定すればよいのだろうか、戸惑いと不安が地層のように積み重なる感覚がした。ただ、明白であったのは、「できるだけことをやりたい」と考えた場合、同じ大学の樋口先生が協力を惜しまないでくださることであった。「オペラントライフの視点」（樋口・望月・山口・佐藤, 1979）の著者らしく、コロナ禍にあっても動じず、百戦錬磨のスキルで、先生が日頃から仰る「能動的オペラント」に勤しんでおられた。前年度にご定年を迎えられたのだが、思いがけず、年次大会がこうした非常事態のもとでの振る舞いについて、先生から学ぶ場になった。「オンラインでも当初予定していた企画をできるだけやる」という方

針をとることは、一人だったら難しかったと思う。

自分にとって今大会との向き合い方が明確になり、オンライン開催という新しい大会を作っていく面白さも享受しながら、後は、どう具体的に実行するかという方法の問題に随分、悩んだ。ある問題が解決されたと思ったら、別のところで問題が出て、何度も練り直し、大会に参加された方や参加を検討されていた方に、うまくお知らせをお届けできなかったことも多々あると思う。スケジュール設定も今になって思えば、工夫できたところがある。右往左往しているときに、星槎大学の三田地先生には早くから手を差し伸べていただき、Zoomでの懇親会を丸ごと担ってくださった。大阪市立大学の佐伯先生には、当日に間に合うのかと焦っていた頃、年次大会を担当された経験から多くのご助言をいただき、事務作業も助けていただいた。発表者の方、参加者の方、他にも多くの方にご協力をいただき、3日間、進行できたことは感謝である。

閉会式、準備委員会の樋口、吉岡、井藤、
安達と学生スタッフの松村くん

これを書いている 10 月 6 日、所属する大学
では前日から対面授業が大幅に再開され、学生
の賑わいが戻ってきた校舎に、これでなくっちゃ
ねと樋口先生や同僚と喜んだ。1 箇所しか開
錠されていなかった各建物の入り口扉がすべて
開放され、同期してぼんやりあった心理的な詰
まりがすうっと解放されていくように感じられ
た。今大会は、コロナ禍の緊張や画面を見続け
る物理的な疲労など相まって、ある種、異様な
心身の状態で臨んだ大会と言えるだろう。そん
な中、会を盛り上げてくださったすべての方に
改めてお礼申し上げたい。

そして、このニューズレターは創刊 100 号目
だそうである。院生の頃、ニューズレターの印
刷作業をお手伝いしたとき、立命館大学の藤先
生から輪転機の使い方を教わったことが懐かし

い。100 号を祝し、豊橋発祥とされる手筒花火
の写真を掲載する（今年は NHK の朝ドラ「エ
ール」のロケ地にもなっており、ぜひ、お越し
いただきましたかった！）。

吉田神社の手筒花火

引用文献

樋口義治・望月 昭・山口耕一・佐藤方哉(1979).
オペラントライフの視点 哲学, 69, 67- 89.

<若手会を代表して>

行動分析学のミライ：これからの25年間を展望する

松田 壮一郎

(筑波大学)

本記事が掲載されるのは、日本行動分析学会のニューズレター100号目ということらしい。創刊号は1995年に発刊されているということなので、私はまだランドセルを背負っていたことになる。創刊されてから今まで、四半世紀が過ぎている。そう、「四半世紀」という単語を初めて使うので、私はドキドキしているのである。生涯のうち、この単語を使う、適切な機会はごく僅かだろう（執筆機会を頂きありがとうございます）。

さて、私以外の執筆陣は全員、「大御所」らしい。大変申し訳ないが、若手会委員の方が、今後25年間の行動分析学への貢献は確実に大きいはずなので、読者の皆様は、こちらの記事には是非注目して頂きたい。もちろん、常日頃、学会で「ジジィ、ババァ」を連呼する私であっても、先人たちのAntecedentsとしての「機能」へ、大いに感謝している（大変恐縮ですが、「個体」へは還元しません、ここは行動分析学会なので）。四半世紀後に（もし万が一、生存しているのであれば）、しっかりと「ジジィ、ババァ」になるであろう、私は、これからの「行動分析学」の話、そう、これから25年先の「ミライ」の話がしたい。

我々、行動分析学会の若手は、今日も明日も困難に直面するが、それでも私には夢がある。それは、私の個人的な夢に深く根差した夢である。

1. 私には夢がある。それは、いつの日か、行動分析家が立ち上がり、「自由意思など存

在しない」という思想を、この国に実現させるという夢である。

2. 私には夢がある。それは、いつの日か、私の子どもたちが、性格や特性によってではなく、行動の変化そのものによって評価される国に住むという夢である。
3. 私には夢がある。それは、いつの日か、行動分析家がユニコーン企業を設立し、企業内に行動分析学の研究所ができるという夢である。
4. 私には夢がある。それは、いつの日か、ありとあらゆる行動のアルゴリズムと表現が見出され、計算理論が構築されるという夢である。
5. 私には夢がある。それは、いつの日か、日常言語の呪縛から解き放たれ、生きとし生けるもの全てが、言語行動の栄光を共に見ることになるという夢である。

政治・行政（1）、臨床・教育（2）、ビジネス（3）、科学（4）、言語（5）、様々な領域において、これらの夢が25年以内に実現することが、私の希望だ。過去2年間で総額3億円以上の研究費に応募し、全て不採択であっても、私は希望を失わない。論文が幾度となくJABAからrejectされても、私は希望を失わない。行動分析学の鐘を鳴り響かせるために。

さあ、理論も基礎も応用も実践も、会員も非会員も、共に手を取り合って、夢が実現する日の到来を早めよう。あらゆる場所から行動分析学の鐘を鳴り響かせよう。

<自著を語る>

スキナー重要論文集（全三巻）

藤巻 峻

日本学術振興会（早稲田大学）

このニューズレターを読んでいる人の中には、行動分析学会員の方もいればそうでない方もいることでしょう。大学に入って行動分析学を学んだ人も、卒業してから学んだ人も、働いてから学んだ人もいることでしょう。さてそこで1つ聞いてみたいことがあります。あなたはB. F. スキナーの著作をどれくらい読んだことがありますか？ 1つも読んだことがないという人もいれば、10本程度読んだことがあるという人もいます。もしかしたら全てを読んだことがあるなんていう猛者もいるかもしれませんね（さすがにいないか。いたら教えて下さい）。

行動分析学の創始者であるスキナーは、多くの著作を残しました。その数は優に200を超えます。ご存じの方も多いと思いますが、スキナーの著作は難解なものが多く、1つの論文を読み解くだけでも相当な努力が必要な場合もあります。これまで日本語で読めるスキナーの著作はごくわずかでした。しかもそれらの多くは絶版となっていて、入手困難なものが多いです。スキナーの著作を原文で読むのはしんどいな、日本語で読めたらいいのにな、と思ったことがある方も多いのではないのでしょうか。（そんな聞こえざる声に応え、、、たわけではないと思いますが）遡ること約3年半前、スキナーの重要論文を翻訳して出版するため、スキナー著作刊行会が結成されました。この会に参加したメンバー全員で地道に翻訳に取り組み、2019年9月に『スキナー重要論文集Ⅰ 心理主義を超えて』、そして今年2020年9月に『スキナー重要論文集Ⅱ 行動の哲学と科学を樹てる』が出版され

ました（詳細は勁草書房のページをご参照ください）。後述しますがこのシリーズは全部で三巻構成となっており、現在は三巻目の出版に向けて翻訳に取り組んでいるところです。

第一巻

<https://www.keisoshobo.co.jp/book/b472090.html>

第二巻

<https://www.keisoshobo.co.jp/book/b528079.html>

さて前置きが長くなりましたが、今回は「自著を語る」コーナーということで、ここからは本書の内容に加えこの刊行会のこれまでの活動について紹介したいと思います。

「スキナーの論文を翻訳して出版しようとしてるんだけど、君も一緒にやらない？」坂上先生からそう声をかけていただいたのは、たしか2017年の初め頃だったと思います。スキナー著作刊行会は、坂上貴之先生（慶應義塾大学名誉教授）、中野良顯先生（NPO法人教育臨床研究機構理事長）、三田地真実先生（星槎大学大学院教授）の3人を中心に発足され、そこに僕が加わって、4人体制でスタートしました。最初の仕事は翻訳する論文の選出でした。スキナーの全著作を調べ上げ、その中から被引用数を主な指標として影響力の強かった論文を約30本選出しました。そしていよいよ翻訳開始！となったわけですが、さすがに4人で30本を翻訳するのは大変です。そこで新たな共同翻訳者を仲

間として加える作戦にでました。最終的には井垣竹晴先生(流通経済大学教授)、丹野貴行先生(明星大学准教授)、八賀洋介先生(専修大学非常勤講師等)、山岸直基先生(流通経済大学教授)が加わり、合計 8 人のメンバーでスキナーの論文に挑むことになりました(注:所属はすべて現在のもの)。この会では月に 1、2 回程度の頻度でミーティングを開催し、各自が翻訳した論文の読みあわせを行ってきました(もちろんミーティング後は飲み会なども)。コロナ禍で対面ミーティングが難しくなっても、第三巻を出版すべく Slack などを用いて継続しています。ミーティングでは、意味がよくわからなかったところや、意味はわかるけどうまく訳せていないとされているところなどを中心に全員で議論し、より良い訳になるよう推敲を重ねてきました。ミーティングでの議論を受けて、各論文の翻訳担当者がさらに翻訳を洗練させます。そこからさらに最終チェック(仮)として坂上先生と三田地先生を中心とした確認作業が入ります。三田地先生の鬼のような(三田地先生、鬼とか言ってすみません)チェックにはもう頭が上がりません。ようやく終わりかと思いきやさらに、、、もういいですねえいませ。とにかく何度も繰り返して翻訳を修正し、最終版を完成させてきました(それでも本書の翻訳が完璧だとはメンバーの誰も思いません。翻訳の誤りのご指摘やご意見があれば、ぜひともお知らせください)。しかし不思議なことに、どれだけ丁寧に時間をかけて読んだつもりでも、読み返す度に新しい発見があったり、これまでの解釈が間違っていたな、と気づくことがあったりします。これがスキナーの論文の持つ魔力なのかもしれませんね。スキナーの論文を翻訳するにあたり、苦労したことは多々あります。その詳細については第一巻と第二巻の「はじめに」で簡潔に紹介されていますので、ぜひご覧ください。

スキナー著作刊行会の詳細や活動紹介はこの辺にして、本書の紹介に移りたいと思います。上で述べたように、本書は三巻構成となってい

ます。第一巻は、行動の科学的研究を支える哲学としての徹底的行動主義を中心とした著作で構成されています。第二巻は、行動分析学の知見や徹底的行動主義に基づく心理学批判、もしくは文化・社会批判が中心です。主に認知心理学などの内的原因に頼った行動の説明や弱化(罰)を制御の中心とする社会の在り方への批判などです。第三巻は、行動分析学の実験で明らかにされた知見や枠組みの日常世界への具体的な適用について書かれた、理論的もしくは応用的な論文が中心となっています。教育、行動制御、情動制御、行動療法、問題解決、文学、言語行動、迷信行動、動物訓練、認知的行動(コミュニケーション、自己認識)など、テーマは多岐にわたります。第三巻は 2021 年の春頃に出版予定です。乞うご期待!

本書を手にとればスキナーの論文を日本語で読めるわけですが、だからといって完全に理解できるとは保証できません。英語圏の人間がスキナーの論文を読んでも容易に理解できないのと一緒です。この難解さこそが、行動分析学への誤った批判の一因と言えるでしょう。実際に、スキナーの論文を読んで挫折した経験がある方の中には、日本語で読めたとしても理解できるか不安に思う方もいるかもしれません。そこで、本刊行会メンバーが、自身の訳した論文の解説を行うセミナーのようなものを水面下で企画しています。なお、この形式のミニバージョンは明星大学にて丹野先生主催で一度実施済みです。まだ詳細などはっきりと決まっていますが、三田地先生を中心に第三巻出版後の開催を目指しています。三田地先生から発信される情報はお見逃しなく。こちらも乞うご期待!

最後になりましたが、本シリーズの刊行にあたり、一般財団法人 高久国際奨学財団(高久眞佐子理事長)から 3 年にわたる援助を得ました。財団による援助なくして本シリーズの出版はあり得ませんでした。本刊行会を代表し、この場を借りて高久国際奨学財団に厚く御礼申し上げます。また、一個人としてもこのような機

会に恵まれたことに感謝申し上げます。経験の浅い駆け出しのポスドクとして、このような大仕事に携われたことを誇りに思います。ありがとうございました。本書が行動分析家に限らず

多くの方の手に渡り、スキナーの研究業績や行動分析学が正しく理解されることを願って。

訳者を代表して 藤巻 峻

編集後記

記念すべき 100 号の編集に立ち会えた幸運と素晴らしい原稿を送ってくださった皆さまに深く感謝致します。また、いつも迅速で的確で素晴らしい編集作業を行ってくださる編集チームの皆さまにもこの場を借りて御礼申し上げます。これからも面白くてためになるニューズレターを刊行していけるよう頑張っていきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。(渉外担当理事：OKB)

ニューズレター愛読者の皆様、そしてご多忙にも関わらず素敵な記事をご寄稿いただいております先生方、いつもありがとうございます！100 号という区切りに立ち合うことができ、一読者として大変光栄です。不確実な時代にあっても、行動分析学が原点となり、未来を描く座標となってくれることを改めて感じました。これからも続く行動分析学界の発展を願わずにはられません。次の区切りには、今よりも良い時代で！！(A.K.)

1995 年から続くニューズレターも今回でなんと 100 号です。100 号にあたり、これまでの記事を少し振り返ってみました。映画を行動分析的にみてみたり、その時話題になっている事件・ニュースについて行動分析学としてどのように貢献できるかなど、行動分析学あるいは行動分析家の多様性を感じられる記事がたくさん見つかりました(ついつい時間も忘れて一気に読んでしまうほど)。今後もこれまでのように、行動分析学のユニークで学びになる記事を提供できるよう努めて参ります。最後に、記念すべき 100 号となる記事をご執筆いただいた皆様へ改めてお礼申し上げます。(Y.Y.)

ニューズレター 100 号の発刊に携わらせていただき有難うございます！学会員の個性の輝きにいつも脱帽しています。編集部に加わって仕事をさせてもらうことで、少し行動分析学会を知れた気がします。たぶん入口だけど。今後も、みなさまにフレッシュな記事をお届けできるよう頑張ります。(A.O.)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

- ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで開催します。
- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中 4-2-2

畿央大学 教育学部 大久保研究室内

日本行動分析学会ニューズレター編集部 大久保 賢一

E-mail: kenichi.ohkubo@gmail.com